

# 新幹線 発 弦楽器 經由

## 板金の技 世界行

「新幹線の顔」(フロントフェース)を東海道新幹線の開業以来五十年も作ってきた板金加工会社が、その技術をバイオリンなど楽器作りに生かしている。四月にはイ

### アルミ製バイオリン



新幹線の技術を生かしたアルミ製弦楽器を持つ山下工業所の藤井洋征さん(左)と山下竜登社長(右)＝山口県下松市で

タリアの国際見本市で世界デビュー。物づくりにニッポンを支えた職人が精魂を込めた銀色の名器は、新幹線車両と同じように世界を極めるか。

(藤浪繁雄)

初代新幹線の0系、東北新幹線のE5系、今月長野新幹線にデビューしたE7系…。

鉄からアルミへと素材は変わり、車両の高速化で形状も様変わりしたが、一貫してフロントフェースを請け負っているのは、山口県下松市の山下工業所。市内で車両を製造する日立製作所の発注で、職人たちがハンマーをコツコツたたいて「顔」を作ってきた。従業員三十人あまり。「打ち出し板金」という町工場の技術が、美しい曲面の顔には欠かせないのだ。

「技術の伝承には時間がかかる上、受け継いでくれる若い職人がおらず、社の未来に危機感を持っていた」とは、

## イタリアの見本市へ

社長の山下竜登さん(五〇)。家を継ぐため、金融関係から転じた二〇〇七年ごろを振り返る。

「職人技の存在を知ってもらい、資質ある若い人に関心を持ってほしい」。そう思案を重ねて得た結論が、弦楽器作り。現存する世界最古のチエロといわれる十六世紀の「ザ・キング」や、バイオリンの名器ストラディバリウスの図面まで取り寄せた。

本来の仕事の合間に楽器作りに取り組んだのは、「現代の名工」にも選ばれている藤井洋征さん(六七)。この道五十年あまりの大ベテランだ。

〇八年のアルミ合金製チェロ以来、演奏者らの感想を聞きながら改良。バイオリンは当初、一キ以上あったが、最新型は木製並みの約五百ギに軽量化、音響面も工夫を凝らした。これまでにバイオリン六丁、チェロ五丁、ピオラ一丁を生み出した。知らず知らずのうちに「新幹線バイオリン」と呼ばれ、プロの演奏家が音色を披露すると「旅情を誘う」と評判になった。

新幹線と楽器という意外な

取り合わせは、山下工業所という小さな町工場の知名度を上げたようだ。職人を目指す若者の採用にも結び付いたのだ。「買いたい」という問い合わせもあるが、山下社長は「まだ販売できるような品質ではない」と慎重だ。あくまで「打ち出し板金の技術を知ってもらったための道具」にこだわる。

だが、世間は放っておかない。東京・台場の日本科学未来館で開催中の「THE 世界一展」(五月六日まで)で、バイオリン一丁が展示中だ。四月にイタリア・ミラノで開かれるインテリアや工業製品の見本市「ミラノサローネ」では、日本の逸品の一つとして最新型バイオリンが参考展示される。

山下社長は「ストラディバリウスを生んだイタリアでどんな反応があるか楽しみ」と期待し、藤井さんは「何丁手掛けても満足しないし、常に新しいものをイメージしている。アルミの楽器ならではの素晴らしい音も追求したい」。あくなき探求心で、さらなる改良に意欲を見せる。

## 軽量化され音も進化

マヤCM、アニメなどの楽曲を絡めて演奏するなど、ユーモアあふれる活動を展開している。約二年前から、鉄道イベントなどで岡田がアルミ製バイオリンを演奏している。

「最初は重いと思ったが、

随分軽くなった」と岡田。音色には「こもった感じだった音が解消され、最近では明るい音も出せる」。結成十周年を記念したアルバム「SUGI TETSU ACADEMY CA」でも、舞曲「いい日旅

立ち」をアルミ製バイオリンで演奏している。アルバムでは「東京フィルハーモニー交響楽団」と共演。「冗談クラシック」と称して十年続けている活動も新境地に。杉浦は「幅広い世代に通用する音楽をやりたい」。四月二十八―三十日に東京・紀尾井町サロナーでコンサートを開く。



スギテツの杉浦哲郎(右)と岡田鉄平(左)＝東京・内幸町で

### 演奏する「スギテツ」

鉄道好きが高じて、山下工業所のアルミ製バイオリンを演奏しているクラシックの二人組「スギテツ」。「うちの意見も聞き入れてくれ、確実に改良が進んでいる。音の完成度が高まっている」と進化を実感している。

ピアノの杉浦哲郎とバイオリンの岡田鉄平のスギテツは、クラシックの名曲にドラ